

Title	希臘現代の經濟學
Author(s)	山口, 正太郎
Citation	經濟論叢 (1928), 27(1): 128-132
Issue Date	1928-07-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/129646
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第

卷七十二第

行發日一月七年三和昭

論叢

一般社會學の概念

文學博士

米田庄太郎

經濟靜態について

文學博士

高田保馬

目的稅論

法學博士

神戸正雄

保險と偶然

經濟學博士

小島昌太郎

說苑

計算貨幣と交換貨幣

經濟學士

福井孝治

經濟法の概念

經濟學士

橋本文雄

雜錄

希臘現代の經濟學

法學士

山口正太郎

大戰中の佛蘭西の通貨

經濟學士

島本融

フォン・ペロウ教授を憶ふ

經濟學士

上田藤十郎

獨逸都市の財政統計

經濟學博士

沙見三郎

雜 錄

希臘現代の經濟學

山口正太郎

一 序 言

古代希臘は措て問はず、拾九世紀以降現今に至る迄、獨立した一科學としての經濟學が希臘の國土に如何にして培はれ、成長したであらうか、塊國學派の巨匠ウキ―ザ―教授誕辰七拾五年紀念論文集「現代の經濟學說」第一卷に載せられた希臘雅典大學教授 Andreas 氏の論文によつて同國現代の經濟學の發達を瞥見することとする、同文の中で特に興味を覺えるのは一九〇七、八年頃新學派としての財政學者の一團が「日本人團」と名稱をつけ、新興の精神を代表し議會の財政討論にも中々重きをなしたと云ふことである、同教授は之を以て進歩的、改良的傾向の表現であり日露戰爭

を以て舊歐洲に對する新興勢力の勝利であることが希臘國民に非常な印象を與えたことを物語るものであると云つてゐることである。

二 拾九世紀の經濟學

拾九世紀に於ては經濟學は國家試験の一科目として法科の中にあつたが一般の風潮は試験に應ずるために經濟學を勉強すると云ふに止まり從て之を目的とする教科書の出版以外大した著述は出なかつた、然し希臘人は語學の才に富み智識階級は大抵二三の外國語を了解したから英佛及び一八八〇年以來獨逸の文獻が輸入され此影響の下に月刊の經濟雜誌 *Ökonomik Epitheorisis* が發行さるゝに至つた、議會の討論も關稅政策、本位貨幣問題等に就ては學術的價值を帯びて來るようになった。

拾九世紀の後期には三人の經濟學者を出してゐる、一は Souris で一八九〇年迄大學教授の職に居たが彼の特徴は經濟學を通俗化して國民一般に普及するにあ

- 1) Festschrift zum 75. Geburtstag Wiesers. Die wirtschaftstheorie der Gegenwart. Bd I. 1927, Griechenland, S. 236-246
- 2) a. a. O. S. 239, 240.

つた、主著は「國民經濟學論集」で第三版以降には「統計學概論」を附録としてゐる、其外に「財政學原理」の著もあるが、彼が第一に困難を感じたのは經濟學の術語を創り出すことであつた、例へば Politische Oekonomie を其儘用ふると希臘人は之を都市經濟の意味に解するので Physiologie の語を使用したのが遂に廣く用ひらるゝに至らずに終つた。經濟學上の術語には新古二種の希臘語で如何にしても表現し得られないものがあつたが、古代希臘語に造詣深く又語學の才を有してゐる彼は苦心の末、多くの新造語を考案した、彼の大體の傾向は正統學派であることは彼の著述の主要なものが一八五〇年から七〇年の間に出てゐることによつても推察が出来るので未だ歴史派等の影響を受けるに至らなかつたためであらう、然し彼の思想は高踏的理想主義であつたがために商工業政策等には全く無關心であつた、唯財政學に於て累進税を主張する点は注目すべき点であらう。

次は Zographos であるが氏の專攻は財政學で一八

八〇年から一九〇一年迄の希臘財政々策を叙した諸論文が公表されてゐる、大藏大臣の秘書官として財政々策の實行に當つたが大體彼は獨逸のリストに傾倒し保護政策を信條としてゐる。

第三は Courant's で獨逸に學び所謂「國民」經濟學を科學として樹立しようとした、國家試験の準備にも彼の著書は盛んに讀まれた、貨幣論としては「兩本位制論」(一八八二年)があつて前二者が單本位制論者であるに對して攻撃の矢を放つてゐる。

三 二拾世紀初期の十年

此期の初頭に世の視聽を集めたのは全國中央銀行總裁 Valotry の「希臘中央銀行の歴史」(一九〇二年)の著述である、其論旨は紙幣は金を準備とせずとも外國の信用證券を基礎としても發行し得ることを主張したのであつて一九一〇年には之が實行となり法律の改正を行つたのであつた、此方法はバルカン戰爭に當つて非常に有効であつたが、然し希臘貨幣の價值が低落し

て容易に平價に復せないので當否の論が盛んに起り獨逸のワグナーの弟子 Simanias の如きは之を攻撃して金準備に返ることを主張し、週刊雜誌 Economiki Hellas の主筆 Katschidis は外國證券準備説を支持し論戰の盛んなるものがあつた。

此論争に續いて起つた問題はコリントの葡萄の生産過剰問題と移民問題であつた、生産過剰に就てはコリントの地位が全く獨占の状態にあるから生産制限をして供給の側を制御すれば價格は自ら引戻されると云ふ議論が勝利を占めたが此問題に就ては希臘の學者殊に此論文の執筆者が外國の雜誌に意見を述べてゐる。³⁾ 北米合衆國への移民問題も亦二十世紀初頭を賑はした論題で移民の結果、希臘農民の減少と、農產物收穫の減少とは移民の故郷送金の利益よりも遙かに重大なる惡結果を招くと云ふ説が勝利を博したのである。此頃少數ではあるが、「日本人團」と云ふ財政學者の一團があつて新興氣力を以て財政問題の研究に従事し議會の財政問題にも非常な影響を與えたものであ

る。

此花々しい「日本人團」の活動と並んで希臘のために氣を吐いたのは獨逸に留學して歸來した若き人々で獨逸式に「社會政策學會」を設立した、此派の領袖は二人あつたが其一人の Contopis は「古代希臘の經濟學説」を著し他の Papamastasson は「經濟學方法論」を著してゐる。其後此派は理論研究に熱中して國家社會主義の學説を唱導するに至つた。

此小文の執筆者 Andreades が經濟學の著述を公にするに至つたのは二拾世紀の初頭からであるが一九〇四年には「希臘に於ける直接税」「英國銀行の歴史」「希臘國債史」の三書を出し、次で彼の生地イオニア島が以前英國の保護領であつた時から特殊の財政組織をもつてゐるので之が研究に従事し、中世伊國のベニス財政組織を移したものであることを知つて古文書の研究から一九一四年に「イオニア島のベニス財政經濟的組織」の著を出すに至つた、一九一八年には「希臘財政史」を出したが此書は近く一九二六年に獨譯が出て、

3) Andreadis, The current crisis in Greece. Economic Journal, 1905. La surproduction des raisins de Corinthe et la Société privilégiée. Revue Economique Internationale. 1909.

英譯も準備中だと云う、著者は英佛獨に留學したが財政學では Roscher, Wegner, Stein, Cohn, Lotz, Sax に負ふ處多い、大體の傾向は折衷學派で、如何なる學說もそれ一つで絶對的妥當なものはないと云ふ信念をもつてゐる、財政學の外には「戰時中及び其後の英國の人口」(一九二二年)の著があり戰後英國に於て婦人の數が男子に超過する事は全國に政治上、經濟上の危機を醸成すること、及び産兒制限の不可なことを全書で述べたと云つてゐる。

四 一九一〇年より最近迄

此時期に於て希臘の經濟は人口の増加と共に進み一般人民も經濟問題に興味を有することとなり、加ふるに各國文献の翻譯が盛んになることとなつた、唯物史觀の思想も亦輸入され Corrado 氏は此見地から拾九世紀初頭の希臘獨立戰爭を研究し大著を出してゐる、社會問題も亦全時に切迫して工場法の發布となつたが全國にとつては寧ろ問題は農業勞働の方面に存在した、

中央銀行の補助の下に農業組合が非常な勢で勃興したから之に關する議論の發表も盛んであつた、歐州大戰後、大學の外に高等商業學校三つと高等工業學校一つを設けることとなり後者の教授 Corrado 氏の國有鐵道問題の著が出た。

次に Kaissack 氏はヘルクナーの勞働問題を翻譯し今は經濟省の役人として失業保險と勞働契約法の實施に努力してゐる、全氏は別に有名な經濟學者の學說を編纂した著述を出して其最後に企業組織としては米國のテイラー、フォード等に倣ふことを薦めてゐる、彼は一九一九年迄は伯林に滞在してゐたが希臘に歸來してからは「社會科學及び法律學雜誌」四季年報を主幹してゐる。

高等商業には二人の經濟學者が居る、一人は Charité 氏で經濟原論と經濟史を講義してゐるが、原論は出版された講義録によるとメンガー、ウキーザーの學國派を金科玉條とし、それに歴史的研究所を以て補つてゐるので、新しい處ではリーフマン、カッセル、シュ

パンに負ふ處多いと云ひ、經濟史はシュモラー、ゾムバルト、ビツヒャーに依據してゐると云つてゐる。

今一人は「Etakis」で貨幣論の專攻者で「本位制度」(一九二三)の著があり名目主義の主張者である、他の著「財集中論」(一九二五)ではカルテルとトラストの問題を論じてゐる。

大學には Vavasseur 教授があるが、氏はミューンヘン留學から歸ると經濟省の統計局主任として農業統計に信頼すべきものを出して名聲を高め、其著「人口論」で教授に任命された、經濟學の立物は奥國派で、殊にフキリツボヴヤツチに私淑してゐる。

此他に若い人々で獨、佛の大學にドクトル論文を出してゐる人が澤山あるが、之等は特に希臘の學問とは云ふことが出来ないから述べない、要するに希臘の經濟學は一方に於て希臘それ自身の經濟發達の史的研究所、他方に於て學理として萬國共通の原理を研究するの二方面に進んでゐると云うべきであらう。